

<抜刷り>

# 富士見市立資料館調査研究報告

## 第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
★資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています  
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします  
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

<資料紹介>

## 南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

菅沼慎太郎（富士見市教育委員会生涯学習課）

### 1. はじめに

富士見市針ヶ谷に所在する南通遺跡では、区画整理事業や宅地開発等に伴う発掘調査が大部分で行われてきた。針ヶ谷小学校を中心に広がる弥生時代後期～古墳時代初頭の大規模集落を始め、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が確認されており、人々が反復的に生活を営んできたことが分かっている。

南通遺跡央B地点は、現在、針ヶ谷小学校西隣を通る市道の一部にあたり、昭和 55(1980)年に針ヶ谷地区土地区画整理事業に伴う第Ⅳ・

V次調査として発掘調査が行われた。(佐々木 1983, 1984)。このV次調査の中で、近世墓坑 25基と、それらを囲うようにめぐる2条の溝跡[→追補]が確認された(図 1、遺構番号は遺跡内での通し番号)。

墓坑からは、副葬品として寛永通宝とカワラケが出土している。特に寛永通宝は、3基の墓坑から計 36枚出土している。今回はこの墓坑から出土した寛永通宝を川根氏設定の様式<sup>(1)</sup>に従い分類を行い、出土した3基の墓坑の時期や性格について考察を試みる。

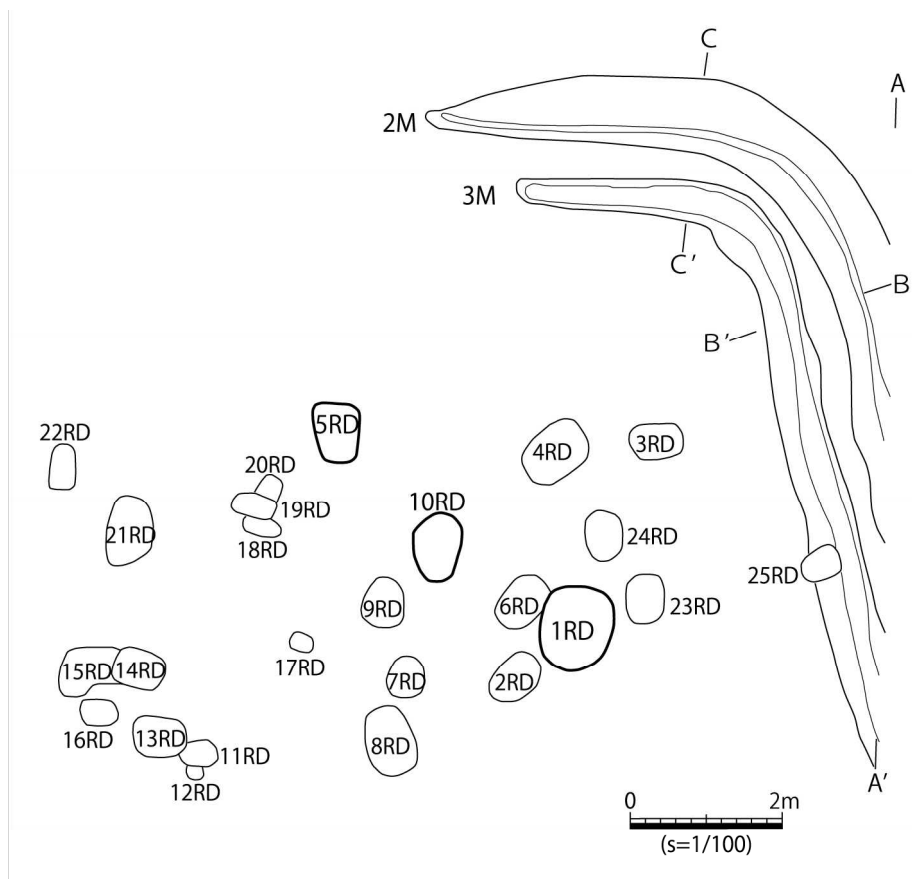


図1 南通遺跡央B地点遺構配置図(墓域のみ)

## 2. 寛永通宝の鑄造年・鑄造地と分類

寛永通宝は江戸時代を通じ、鑄造・流通した通貨である。寛永通宝は、文献資料などからある程度鑄造年や鑄造場所が判明している。

まず、寛永13(1636)年に江戸、近江坂本、建仁寺(京都)、大坂で鑄造が開始された。翌年には水戸、仙台、吉田、松本、高田、長門、備前、豊後の8か所でも鑄造を開始した。また同16(1639)年には駿河でも鑄造を開始し流通を本格化させていった(川根分類I a様式)。

その後、同17(1640)年には鑄造が一時停止されたが、明暦2(1656)年から万治2(1659)まで、江戸浅草と駿河沓谷<sup>くつや</sup>で鑄造が再開された(I b様式)。

寛文8(1668)年、一時停止されていた鑄造が再開され、天和3(1683)年まで江戸亀戸のみで鑄造が行われた(II様式)。幕府が中世以来の渡来銭流通を絶ち、寛永通宝による銭貨の統一を達成するため、一カ所の銭座(亀戸)で鑄造することにより、銭質が統一され、かつ良質な寛永通宝を流通させる狙いがあったと考えられている。

元禄10(1697)年には再度、鑄造が再開され、江戸亀戸に加え、京都七条でも鑄造が開始された(III a様式)。また川根氏は宝永5(1708)年から江戸亀戸で鑄造されたものをIII b様式としている。

正徳4(1714)年から享保17(1732)年には亀戸に加え、仙台、佐渡、江戸十万坪、七条、難波の全国6カ所に銭座を設置し鑄造を行った。新井白石による幣制改革が行われた時期であり、III様式期には一時落ちていた銭質が、金銀貨と共に再び良質なものが鑄造されるようになった(IV様式)。

元文元(1736)年から延享2(1745)年には鑄造銭座を募集したことで、さらに銭座が増加していくことになる。佐渡や仙台、亀戸などのIV期から継続する銭座に加え、日光や足尾、高

津、長崎など合計19カ所にもものぼる銭座が稼働し、最も銭座が多い時期である。銅の産出量が全国的に減少し、元文4(1736)年以降には鉄一文銭が寛永通宝銅銭の補助として発行されるようになる(V様式)。

VI様式以降は幕府直轄銭座のみの運営に回帰し、鉄一文銭に加え真鍮四文銭や鉄四文銭、文久永宝などの鑄造が開始され、寛永通宝銅銭の鑄造は廃止された。今回取り上げる資料は、すべて寛永通宝銅銭でありV様式までの資料であるため、VI様式以降の詳細な説明は省くが、概略をまとめておく。

明和2(1765)年から鉄一文銭の鑄造が再開され、明和5(1768)年から天明8(1788)年に真鍮<sup>しんちゅう</sup>四文銭が初めて発行された(VI様式)。

文政4(1821)年から同8年の間は真鍮四文銭のみが鑄造され(VII様式)、天保6(1835)年から同12年の間は鉄一文銭のみが鑄造された(VIII様式)。また、天保通宝の鑄造もこの時期に該当する。

安政4(1857)から同6年の間は真鍮四文銭のみが鑄造され(IX様式)、安政6年からは、また鉄一文銭の鑄造が再開し、万延元(1860)年以降には鉄四文銭が発行された(X様式)。

また、文久3(1863)年からは、文久永宝(銅四文銭)が鑄造された。

## 3. 墓坑出土寛永通宝

では、南通遺跡央B地点の近世墓坑から出土した寛永通宝を見ていこう。央B地点では、1号墓坑から11枚、5号墓坑から5枚、10号墓坑から20枚が出土している<sup>(2)</sup>。この計36枚の寛永通宝の計測値と分類を表1に、各様式ごとの法量の平均値を表2にまとめた。分類は川根(前出)に、計測方法は高橋(2001)によった。なお、表2については、出土数が0のIII b式・IV式と、1点のみの出土数のI b式・II b式は除いている。

様式ごとの法量差については、上記先行研

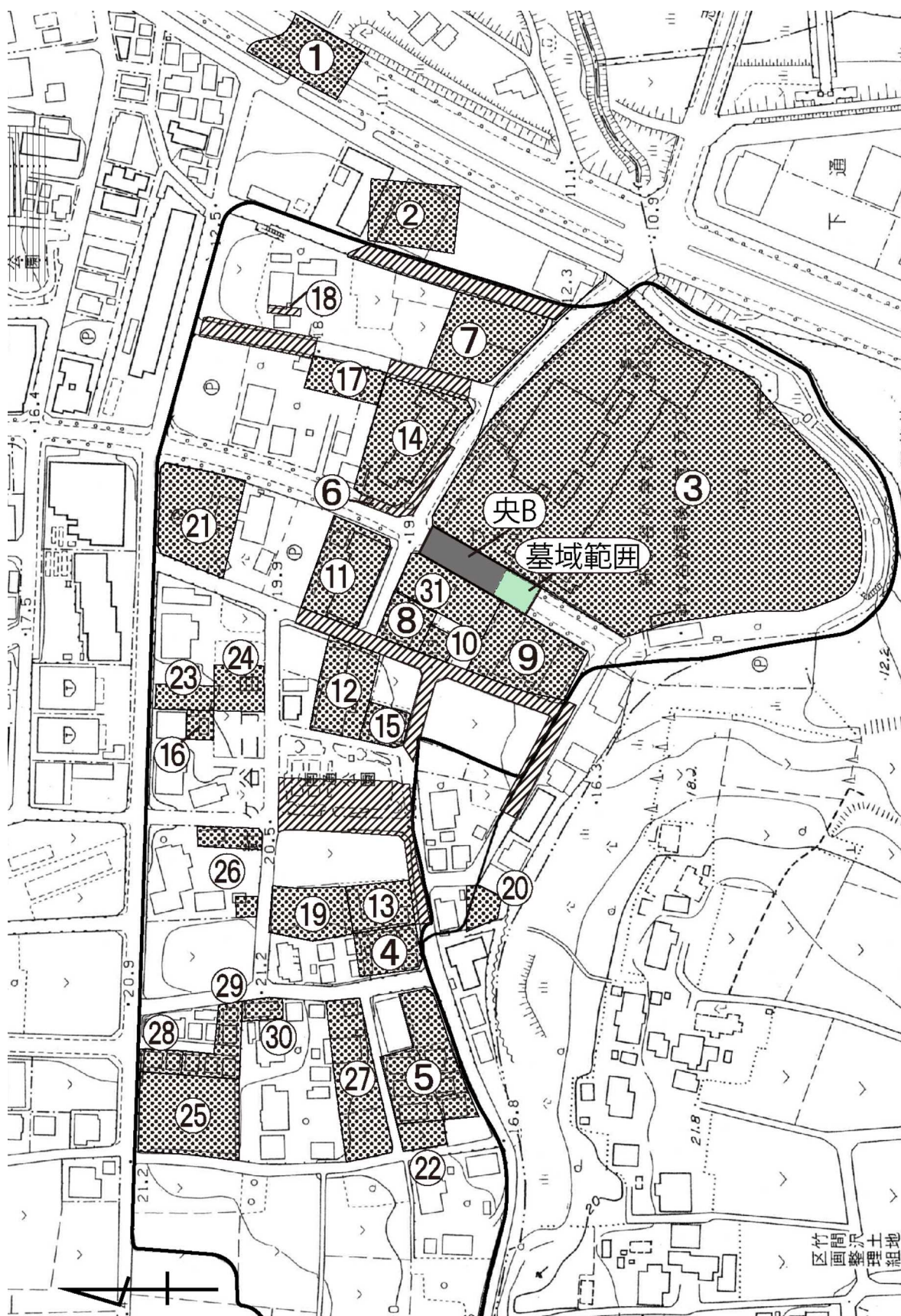
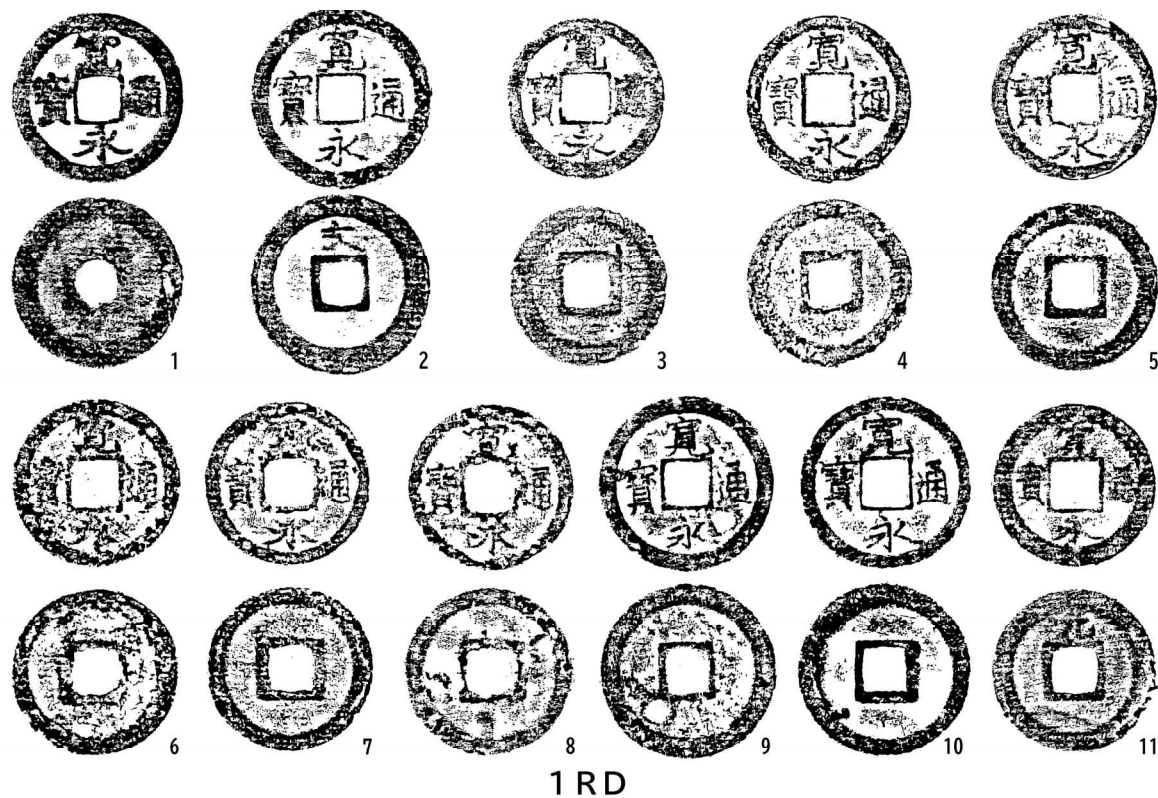


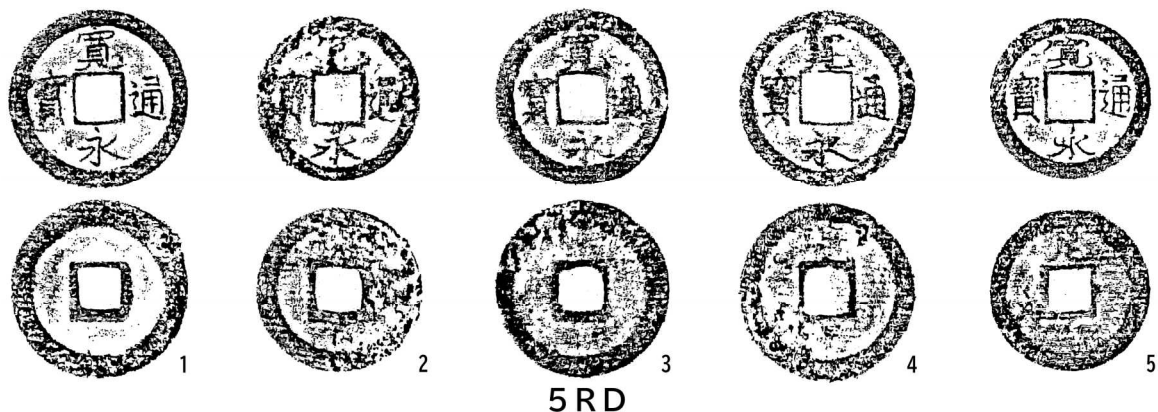
図2 南通遺跡中央B地点位置図 (S=1/3000)

表1 墓坑出土寛永通宝観察表

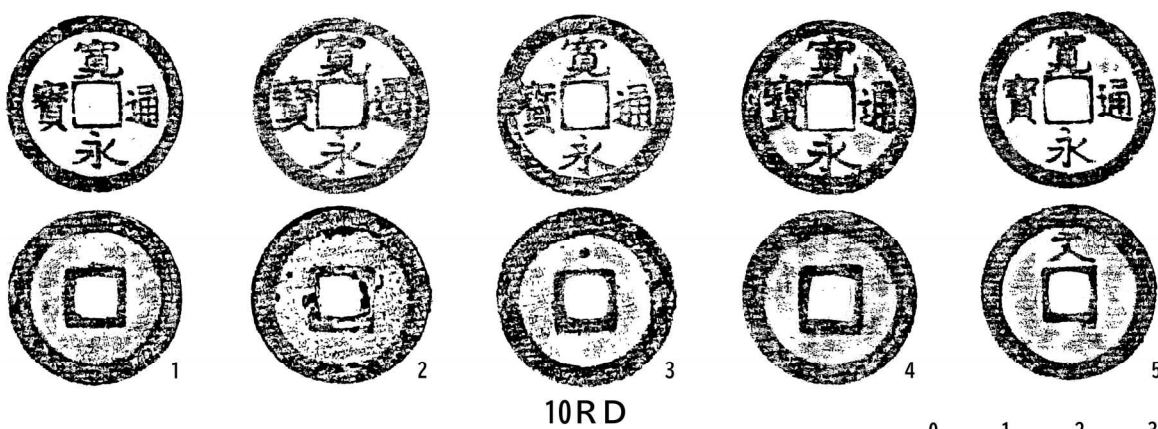
墓坑	番号	様式	型式	背文	輪外径 (mm)		輪内径 (mm)		郭外幅 (mm)		郭内幅 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)
					縦	横	縦	横	縦	横	縦	横		
1号墓坑(10R)	1	I a	狭永型		24.0	24.0	19.0	19.2	7.2	7.2	6.0	5.8	1.2	3.5
	2	II a	織字背文	文	25.3	25.2	20.3	20.4	7.1	7.1	5.8	5.9	1.4	3.9
	3	III a	跳永型(四ツ宝)		22.7	22.6	18.0	17.8	7.5	7.8	6.3	6.7	1.0	2.4
	4	III a	広永型(四ツ宝)		23.3	23.1	19.1	19.0	8.0	8.0	6.3	6.2	1.8	3.2
	5	III a	広永型(四ツ宝)		23.2	23.8	19.2	19.1	7.6	7.3	6.2	6.4	1.2	2.8
	6	III a	広永型(四ツ宝)		23.8	23.5	19.0	19.0	8.0	8.1	6.3	6.5	1.1	2.4
	7	III a	勁永型(四ツ宝)		23.0	23.1	19.2	19.0	8.0	7.9	6.3	6.3	1.8	3.4
	8	III a	勁永広寛型(四ツ宝)		23.5	23.0	19.1	18.2	8.1	7.5	6.4	6.5	1.3	2.8
	9	III a	広目寛型(不旧手)		24.2	24.3	19.7	19.6	7.2	7.1	5.9	6.0	1.2	2.7
	10	III a	広目寛型(不旧手)		24.0	24.0	20.1	20.0	7.1	7.2	6.3	6.3	1.2	3.6
	11	V	小字背元	元	23.1	23.0	17.6	17.1	8.0	8.1	6.4	6.4	1.1	2.7
(10R)5号墓坑	1	II b	縮字文無背型		25.0	24.8	20.2	19.8	7.5	7.3	6.0	5.8	1.5	3.8
	2	III a	広永型(四ツ宝)		22.9	23.2	18.8	18.3	7.8	7.9	6.3	6.2	1.1	2.7
	3	III a	広目寛型(不旧手)		24.3	24.0	18.5	19.1	8.0	8.0	6.3	6.2	1.3	2.5
	4	III a	狭目寛型(不旧手)		24.8	24.8	20.0	20.5	7.6	7.8	6.8	6.6	1.2	2.3
	5	V	大字背足	足	22.3	22.4	18.1	17.5	7.3	7.3	6.0	5.9	1.2	2.6
10号墓坑(10RD)	1	I a	小字型		24.9	24.9	20.0	19.3	7.0	7.1	5.5	5.5	1.2	3.4
	2	I a	流永型		24.7	24.6	20.3	20.5	7.7	7.7	5.4	5.6	1.6	4.4
	3	I a	背星文	●	24.9	25.0	19.7	19.6	7.4	7.3	5.8	5.7	1.1	3.5
	4	I b	高寛型		24.9	24.9	20.0	19.1	7.8	7.9	5.8	5.9	1.8	4.5
	5	II a	正字背文	文	24.8	24.9	17.2	19.7	7.5	7.8	5.8	5.7	1.8	4.1
	6	II a	正字背文	文	25.0	25.5	20.6	20.4	7.8	7.9	5.6	5.5	1.1	3.4
	7	II a	中字背文	文	25.2	25.2	20.8	20.7	7.8	7.9	6.2	6.1	1.2	3.4
	8	II a	中字背文	文	24.4	24.5	20.2	20.2	7.8	7.9	6.4	6.2	1.2	3.4
	9	II a	細字背文	文	24.9	25.0	20.5	20.1	7.8	7.9	5.9	5.7	1.7	3.7
	10	II a	細字背文	文	25.1	25.0	20.5	20.0	7.2	7.6	5.8	5.8	1.1	3.4
	11	II a	縮字背文	文	25.1	25.2	20.1	20.2	7.3	7.6	5.8	5.8	1.2	3.4
	12	II a	織字背文	文	25.4	25.8	20.8	20.6	7.7	7.1	5.8	5.8	1.4	3.4
	13	II a	織字背文	文	25.3	25.2	20.8	20.5	7.9	7.5	6.0	5.8	1.1	3.4
	14	III a	広永型(四ツ宝)		23.1	23.2	18.9	19.0	7.8	7.2	6.3	6.2	1.2	2.9
	15	III a	広永型(四ツ宝)		23.2	23.5	19.0	19.2	7.1	7.5	6.3	6.3	1.5	3.4
	16	III a	跳永型(四ツ宝)		23.1	23.1	19.1	19.1	7.6	8.0	7.2	6.9	1.0	2.2
	17	III a	跳永型(四ツ宝)		23.1	23.2	19.0	19.0	7.8	7.8	6.1	6.0	1.4	3.3
	18	III a	狭目寛型(不旧手)		25.3	25.1	20.8	20.5	8.0	8.0	5.8	6.0	1.4	3.5
	19	V	小字背元	元	23.0	23.0	17.9	16.9	7.0	6.9	5.2	5.3	1.7	3.1
	20	V	小字背元	元	22.8	22.7	18.7	18.5	8.3	8.1	6.2	6.3	1.3	2.6



1 RD



5 RD



10 RD

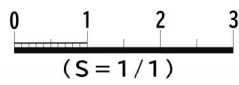


图3 墓坑出土寛永通宝拓影图1

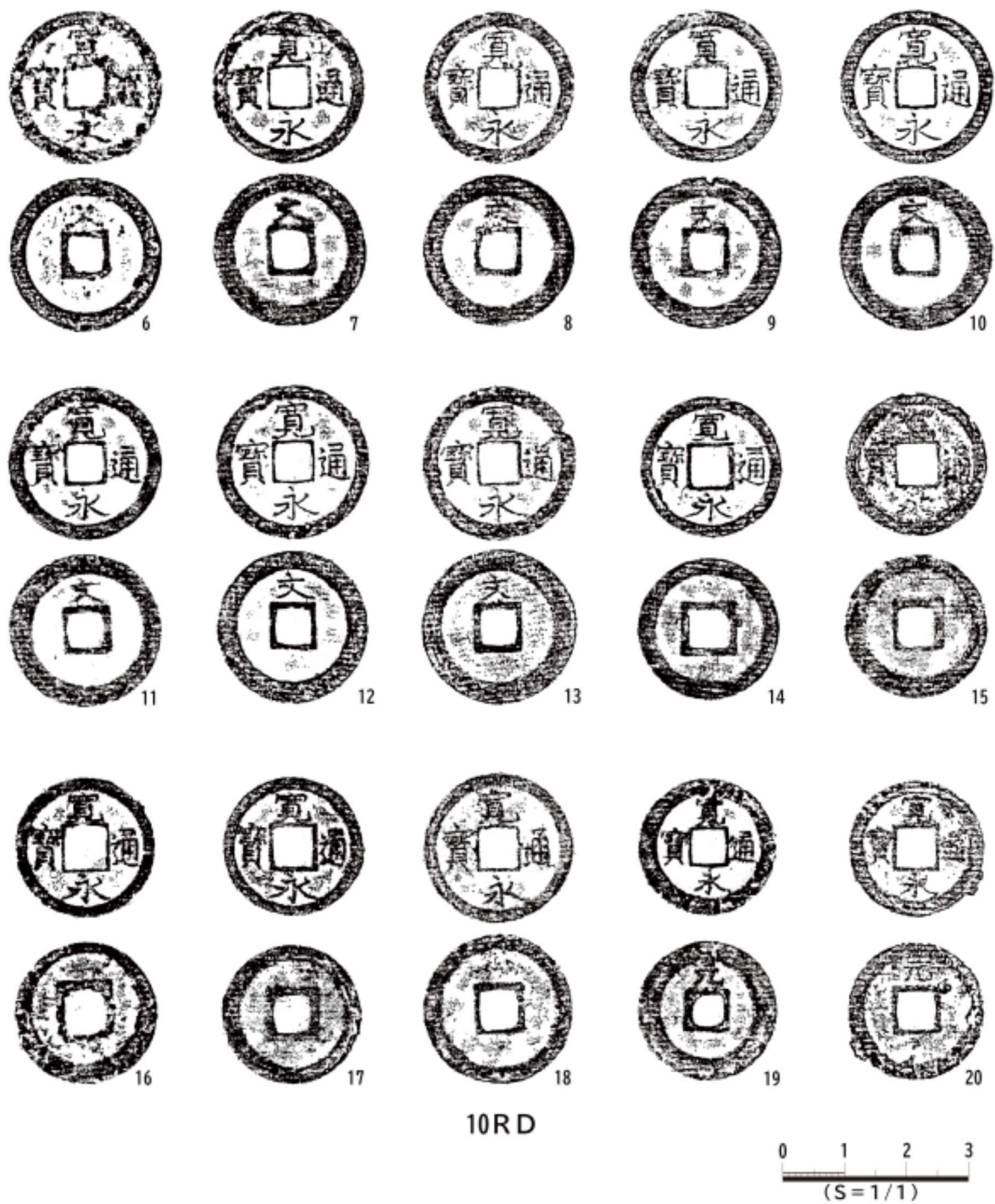


図4 墓坑出土寛永通宝拓影図2

表2 各様式における法量の平均値

法量 様式	点数	輪外径(mm)		輪内径(mm)		郭外幅(mm)		郭内幅(mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)
		縦	横	縦	横	縦	横	縦	横		
I a	4	24.6	24.6	19.7	19.7	7.3	7.3	5.7	5.7	1.3	3.7
II a	10	25.1	25.1	20.2	20.3	7.6	7.6	5.9	5.8	1.3	3.6
III a	16	23.6	23.6	19.2	19.1	8.0	7.9	6.3	6.3	1.2	2.9
V	4	22.8	22.8	18.1	17.5	7.7	7.6	5.9	6.0	1.3	2.8

究<sup>3)</sup>と概ね同様の結果が見て取れた。輪外径・輪内径・郭内幅はⅠa式からⅡa式にかけて大型化し、Ⅲa式で一回り小さくなり、Ⅴ式でさらに小型化する。郭外幅はⅠa式からⅢa式にかけて大型化し、Ⅴ式で小型化する。銭厚はⅠa式からⅡa式にかけて厚くなり、Ⅲa式で一度薄くなる。Ⅴ式ではまた厚くなる。重量においては、Ⅰa式からⅤ式まで徐々に軽くなっていく結果となった。

また、輪内径の値から郭外幅の値を引いた数値が、文字を配置できる幅ということになるが、Ⅰa式が14.0～14.1mm、Ⅱa式が14.3～14.4mm、Ⅲa式が約12.8～12.9mm、Ⅴ式は11.5～12.2mmとなる。Ⅰa式からⅡa式の値は大きくなり、Ⅱa式からⅤ式にかけて小さくなる。

このように、輪外径・郭外幅・銭圧・輪内径－郭外幅のすべてでⅡa様式が大きな値となる。また、川根氏らの研究で、Ⅱa式は法量計測や金属成分分析の結果から個体差が最も少ない様式であることも示されている。

寛文年間では、渡来銭から寛永通宝への完全移行のため、より良質な寛永通宝が求められていた。銭貨の規格を統一する必要があり、江戸亀戸でのみ集中して鑄造されたのがⅡa式である。この良質な銭貨を追い求めた結果が、先に示した数値の大型化にも現れたのだろうか。

#### 4. 寛永通宝からみた墓坑

1・5・10号墓坑すべての墓坑からⅤ期の銭貨（足尾銭・高津銭）が出土していることから、央B地点の墓域の中で、少なくとも寛永通宝を出土した3基の墓坑は、寛保年間かそれ以降に造られたことが分かる。

個別の遺構ごとに出土割合（表3）をみると、1号墓坑は、Ⅰa・Ⅱa・Ⅴ式が各1枚で全体の9%ずつを占める。残りの73%（8枚）はすべてⅢa式となっている。

5号墓坑は5枚の出土しかないが、Ⅱb・Ⅴ式が各1枚（20%）、Ⅲa式が3枚（60%）となっている。

10号墓坑は、Ⅰa式が15%（3枚）、Ⅰb式が5%（1枚）、Ⅱa式が45%（9枚）、Ⅲa式が25%（5枚）、Ⅴ式が10%（2枚）となっている（表3）。

全体的にⅢa式が多く出土している傾向にある。しかし、1・5号墓が全体の73%・60%と過半数を占めているのに対し、10号墓は全体の1/4程度にとどまっている。逆にⅡa式が45%と半数近くを占めている結果となった。

各期の鑄造量は、Ⅰ期合計325万貫文、Ⅱ期合計197万貫文、Ⅲ期合計200万貫文、Ⅳ期合計234万貫文、Ⅴ期合計438万貫文である（岩橋2018）。1・5号墓はⅤ期以降の墓坑ながら鑄造量の比較的少ないⅢa期の枚数が多いことが特筆される。10号墓に至ってはさらに鑄造量の少ないⅡa期が最も多い出土量となっている。

10号墓のⅡa期が最も多い事実については、先述の通りⅡa期（文銭期）が最も銭質の安定していた時期であり、質の良い銭貨を選んで副葬したと考えられる。

Ⅲa期が最も多い1・5号墓については、10号墓と比べ、造営者に撰銭思考があまりなかったか、できなかったのではないだろうか。近世はそれ以前と比べ、葬送観の華美化が顕著にみられるため、貧富の差が出たとするのは過言ではないと考える。

#### 5. まとめ

ここまで、南通遺跡央B地点における近世墓坑について出土銭貨から検討してきた。検討を行った3基の墓坑は、出土した寛永通宝の観察から、寛保年間以降のものであることは前述したが、Ⅵ式以降の寛永通宝が1枚も出土していないことから、18世紀半ばからそ



れほど下ることはないであろう。

また、菅沼（2023）では、寛永通宝の出土枚数から近世の葬送の華美化について触れたが<sup>(4)</sup>、今回、寛永通宝の種類からも華美化志向が確認できた。

寛永通宝は寛永 13 年の鑄造開始以来、継続的に鑄造され、幕末まで広く一般に流通した銭貨である。以前より、出土古銭から遺構の正確な時期判定は難しいとされてきたが、今回の 3 基の墓坑は、ある程度時期が絞り込めたと考える。南通央 B 地点の墓域については、これまで詳細な報告がされずにいた。これは出土遺物についても同様であり、今後、寛永通宝以外の出土遺物であるカワラケの検討も行うことで、より詳細な近世墓地の性格が見えてくるであろう。

最後に、今回取り上げた資料は、富士見市立考古館が収蔵していたものである。整理・保管体制が当時から整えられていたからこそ、今回、当資料を扱うことができた。また、資料の採拓・計測を今野孝之氏、山中陽子氏にご助力いただいた。ここにその点を明記し、感謝の意を表したい。

#### 註

- (1) 川根正教 2001、川根ほか 2005
- (2) 3 基の墓坑とも、ほかの遺構との切り合いや攪乱はほとんど無く、出土した寛永通宝は原位置を保っていると考えられる（図 2）。
- (3) 富士見市殿山遺跡出土例やふじみ野市浄禅寺跡遺跡出土例など、近世後期の墓坑から出土する六道銭に鉄銭や真鍮四文銭が含まれる例は多い。
- (4) 菅沼ほか 2023

#### 引用・参考文献

- 岩橋勝 2018「徳川時代の銭貨在高」名古屋学院大学論集社会科学篇 55(2)
- 川根正教 1995「寛永通宝の基礎的研究 1(上)」出土銭貨(4)
- 川根正教 1996a「寛永通宝の基礎的研究 1(下)」出土銭貨(5)

- 川根正教 1996b「寛永通宝の径・重量における特徴」考古学研究 43
- 川根正教 2001「寛永通宝銅銭の様式分類」出土銭貨研究
- 川根正教・石川功・植木真吾 2005「寛永通宝銅銭の形態的特徴と金属成分分析」考古学研究 12(20)
- 佐々木保俊 1981『針ヶ谷遺跡群Ⅳ』富士見市遺跡調査会調査報告(13)
- 佐々木保俊 1984『針ヶ谷遺跡群－針ヶ谷地区土地区画整理事業に伴う発掘調査－』富士見市遺跡調査会調査報告(23)
- 菅沼慎太郎 2023『令和 5 年春季企画展展示図録 なぎ人を送る -墓と弔いの歴史-』富士見市立難波田城資料館
- 鈴木公雄 1988「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銭貨流通」社会経済史学 53(6)
- 高橋照彦 2001「近世銭貨の生産と品質規格 -寛永通寶と長崎貿易銭の法量計測的研究-」鹿園雑集(2, 3)

〈次頁に追補有り〉

## 追補～「墓域区画溝跡」と爆弾痕～

令和6年2月、央B地点と隣接する第31地点の調査が富士見市教育委員会によって行われた。この調査の中で、央B地点にかかるように確認できた範囲で直径7m以上の大穴が発見された。第二次世界大戦時の爆弾痕である。

昭和20(1945)年4月2日未明、約120基のB29爆撃機が、現・武蔵野市に所在した中島飛行機武蔵製作所を空襲した。その後、目的を達成したB29のうちの2機が現・富士見市域に侵入し、一機は関沢地区から南畑地区へ、もう一機は針ヶ谷地区から南畑地区に向かいながら爆弾を落としていったことが分かっている。針ヶ谷地区には10発以上落とされたと伝えられており、過去の発掘調査でも2カ所が確認されている(和田1991,1992)。第31地点で発見された爆弾痕はこのとき落とされた爆弾のうちの一発と考えられる。

第31地点の調査では、爆弾痕の周囲20mほどまで地山に深い亀裂が入り、爆弾痕に近づくほど地山のロームはボロボロになっていた。この状況が、央B地点で確認された溝跡の状況と似通っている。央B地点の墓域では、前述のとおり2条の溝跡がめぐり、墓域を区画する境界の溝跡と考えられてきた。しかし、溝跡の土層断面図(図5)やエレベーション図(図6)を見ると、溝跡とは断定できないことが分かる。

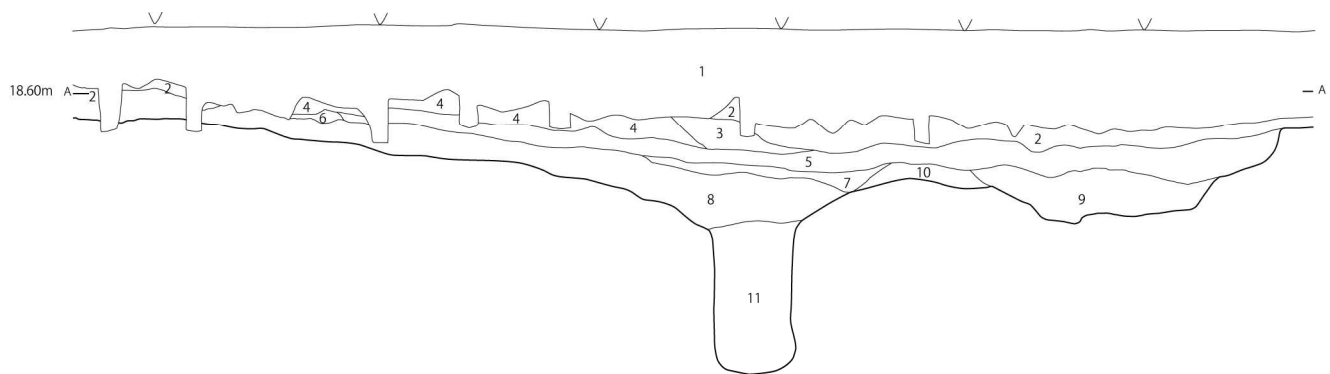
土層断面図では、これまで溝跡として捉えられていた掘込み部分(11層)は、ローム充填

土と記録されている。44年前の調査であり、写真の記録も残されていないため、文字による土層観察記録に頼るしかないが、このローム充填土とは、爆撃の衝撃によってボロボロになった地山であり、その部分を掘り抜いた結果、溝跡のようになったのではないだろうか。エレベーション図をみても、墓域の区画溝と考えるには少々溝の幅が狭いように思える。

央B地点の墓域部分の報告は、これまで数行の文章のみでしか行われていなかった。そこでは、墓坑集中部も地山が不安定であったことが記されている(佐々木1981)。溝跡とした部分は、こういった判断が難しい状況のなか生まれてしまった調査結果なのであろう。第31地点の調査でも、最初はボロボロのロームがどういったものであるのか見当が付かず、掘り過ぎてしまった部分がある。その後、爆弾破片が出土し、爆弾痕であることが分かったのだが、爆弾破片の出土がなければ、間違った記録をしてしまっていたかもしれない。当時、央B地点の調査にあたった諸先輩方も、頭を悩ませたであろうことは想像に難くない。

## 引用・参考文献(追加)

- 和田晋治 1991『南通遺跡第11地点発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会調査報告(37)  
 和田晋治 1992「北通遺跡第40地点」『富士見市遺跡群X』富士見市文化財報告(46)



A-A'

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1 耕作土               | 7 黒褐色土 ローム粒子を少量含む    |
| 2 黒色土 サラサラしている      | 8 明黄褐色土 ロームブロックを多量含む |
| 3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む  | 9 黒褐色土 ロームブロックを多量含む  |
| 4 黒褐色土 ロームブロックを多量含む | 10 黒褐色土 ローム粒子を少量含む   |
| 5 黄褐色土 ロームブロックを多量含む | 11 ローム充填土            |
| 6 黒褐色土 ロームブロックを多量含む |                      |

※水系高は海拔高を示す。

図5 「溝跡」土層断面図(S = 1/60)

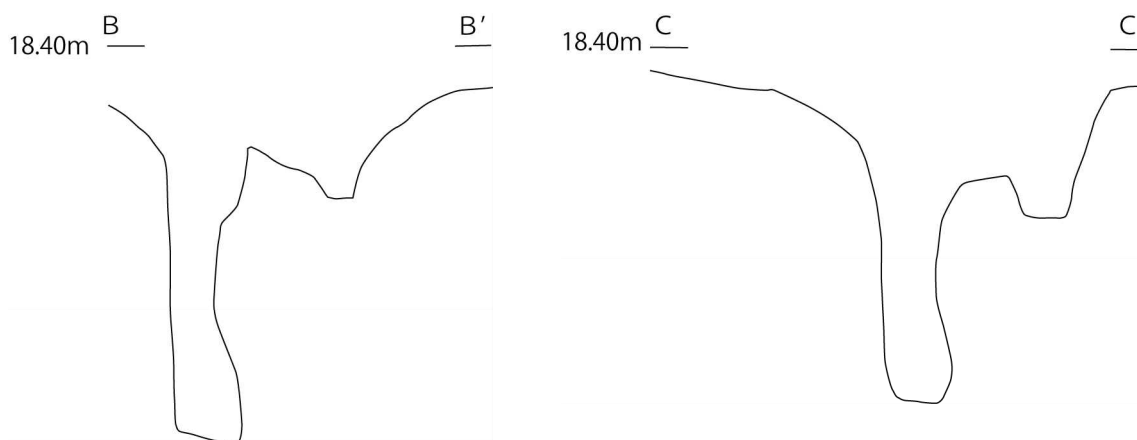


図6 「溝跡」エレベーション図1(S=1/40)